

教職員情報

理学部附属 植物園のいきものたち 第29回 京大植物園の魅力

このコーナーもまもなく3周年です。
今回は京大植物園の魅力をまとめます。

京大植物園は1923年に、北白川追分町遺跡などでしられる、北白川扇状地の水田跡地に開設されました。2ha以下の小面積にも独自性を持たせようと、植物の分類群ごとにゾーンを設け、琵琶湖疎水を導入して池や沼地などを造成するなど、工夫が凝らされています(写真1)。

園内に植栽されながらも、消滅した植物も数多くあります。一方で人為とは無関係に、たくさんの木本や草本の種子が周辺地域から風や鳥類によってもたらされ、北白川本来の自然植生・自然林が回復しつつあります。ここは、平地性の自然林が存在する希有の空間なのです。これは「珍しいもの」を偏重せず、「雑草」も研究材料である、とした郡場寛先生らの卓見の賜です。

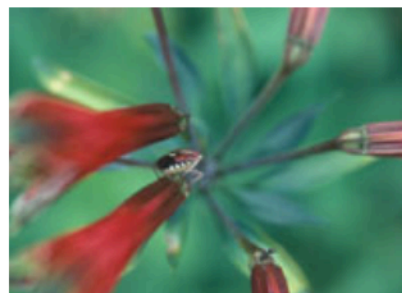
林には、多様で多数の鳥類が採餌や繁殖のためにおとずれ、園内に新たな植物をもたらします。さらに、多様度の高い植物相は多様な環境をうみ、昆虫・節足動物相を豊かにします(写真2)。疎水が引かれたことで水生昆虫や淡水魚などもみられ、それを狙ってカワセミやサギなどがやってきます。またオオタカ類の狩り場でもあります。つまり、ただ多くの生物がいるのではなく多様な生物間相互作用の在り様がつぶさに観察できることこそ、この植物園の魅力であり、ほかの場にはない価値なのです。

一方で、相互作用があるというだけではその関係の永続性は保障されず、それぞれの生物が繁殖し生活環を全うして、遺伝や行動などの情報が子孫に伝えられねばなりません。京大植物園は、生命活動と相互作用の永続の場でもあるのです(写真3)。

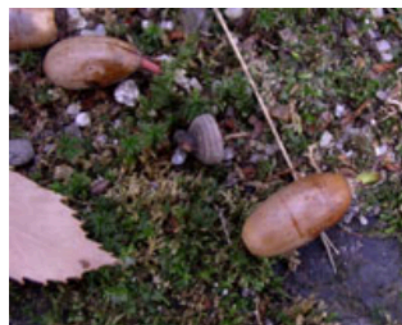
この植物園が、京都市内の京大の本部キャンパスにあることは奇跡的なことにおもえます。身近でありながらほどよく隔離されたこの空間は、過剰な人為を排除したことによって存続しえました。今後100年、外界でどれだけ工事や開発が盛んであっても、京大植物園がこのような魅力と価値を保持し、存続していくことを私はつく希望しています。



▲写真1



▲写真2



▲写真3